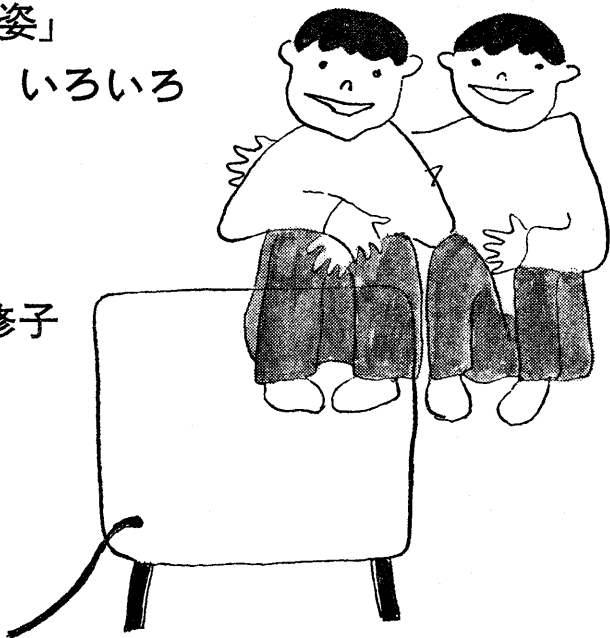


## 「親の姿」

いろいろ

村田修子



ある日曜日の昼近く、玄関のドアがバタンとなつて、ドタドタという子供の足音、ギャギャと張りのあるにぎやかな声がかして、二年生の子が友達をつれて帰ってきた。一年生の弟を交えて、ひとしきりにぎやかなこと。

自分の経験を思い返してみても、学校のない日、学校が終つたあとなど、「○○ちゃん、遊ぼう。」と声を掛けてさそい合つて遊びに入る。声を掛けて呼んだとき、どういふ返事が返ってくるかと、胸をドキドキさせて待つていて、承諾の返事だとうれしくてたまらなかつた思ひは、今でもひしひしと思ひ出される。

ところが私のまわりにいる幼い子供達の様子を見ていると、先ず遊び相手に電話を掛けて「○○さんのお宅ですか。○○君いますか。Aですけれど○○君お願いします。ああ

。君。A だけど、いま遊べる？」こういう交渉から始まる。これは、私が小さかった頃にはとても思い及ばなかった事である。それが、「外へ行ってきます」といって出て行った子供が、遊べる友達を探し当てて連れてきたので、邪魔をしないように遊ばせてやろうと思つて隣のへやを提供した。

子供達は今はやりのおもちゃで暫く遊んでいたが、次第に人恋しくなるのか私のいるへやの方におしかけてきて粘土遊びを始めた。幼児期ならば粘土をやっても、自分の好きなものを作ること満足するけれども、一、二歳年が多いと、作るだけではなく、他のものへと関連を持つ遊びに発展していく。

一人は肉屋、あとはほんこ屋と魚屋になったらしく、お互に売る物を何やかや言いながら作っている。或る程度品物が出来ると相手がほしくなるらしく「電話を掛けて注文して」とまわりの大人に促す。

そこで、まあ専門家という部類に入のおばあちゃんたる私は「このときだ」とばかりに「何のお店が出来たの

ですか」と電話を掛ける様子をして相手になると、気分が盛り上っているときなのですぐにのってくる。そこで、「ではお肉を下さい」というと小学生のことなので「おいくら」とか「どのくらい」とかいう量的な質問が出てくる。またそこで「〇〇円のを二百瓦」とか「〇〇円のを五百瓦ではおいくらですか」「いまこまかいお金がないので三百円でお払いますからおつりを持ってきて下さい」「おつりはいくら持ってきてくれますか」というようにみえみえでんわで話し相手になってやると、ひときわ静かになって計算をしたり、友達と相談しながらやっている。こうなることは当然予想していたことであつたが、これだけのことでいろいろな事を感じた。

先ずうちの子供達は、私の話しの持つてゆき方になっているのか、よそゆきのように電話をかけてもすぐそれと同じ調子になれる。そのとき私が一人の友達に「あなたはなに屋さんですか」と聞いたり注文したりすると、最初はニヤニヤと笑いを浮かべたり、からだをくねらせたりして恥かしそうな様子をしたが、周囲のみんなが真

面目な様子でやっているのをみたせいか、すぐに電話をかけてきたり、紙でお金を作ったたりしてお店屋さんになり切った。その子の素直さ、子供らしさを失っていないかといった様子を見て、他の人をあざ笑ったり、むやみに反対する子供の多い昨今であるだけに大変うれしく思うと同時に、こんな調子で子供に接する親、大人は余りいないのではないかとも思ったりした。

親の立場は様々な事があるので、子供のことにばかりかかわってられないことは分るけれども、子供の興味は一つのことにもそう長く続かないので、ちょっとしたきっかけで先程の例のように計算をさせたり、上手に話をさせたりの指導はできる。これは小学生を相手にした例であったが、幼児に対するときも全く同じで、むしろ年の小さいほうがこういった機会は多い。多いどころではなく、どこにもある。相手になっても小学生よりは一層可愛らしいし楽しいはずである。近頃は子供の話しを聞いてやらす、従って話し相手にもなってあげない親が大変に多い気がする。

連休明けの保育がすんだあと、「今日は子供達の話し相手になってあげるので疲れたわ。みんなが話しを聞いてもらおうと思ってよく話すの。それが途切れないんですもの」という先生の嘆声は、全くそれを物語っていると思う。親にいわせると「話はしますよ」と言うかも知れないが、どうも自分の都合で話し、話題も子供に関係のあることよりも、親自身に関係のある話題が多いと思うけれども、当の本人にはそれは分っていないらしい。この間も遊びにきていた子供に、母親から電話が掛った。子供に「どうしたの？」と聞くと、母親はどこかのスポーツクラブに行くから、〇時になったらそこにくるように、というらしい。子供は言うことをきかず拒否の返事をしている。これ等も親に言わせれば子供をちゃんとさそった、とか、行く場所を子供に教えておいた、ということになるかも知れないが、子供こそいい迷惑で、折角遊びが面白くなってきたばかりなのに、大人ばかりの世界に呼び出されて待たされるのではたまらない。必死にこたわっていた訳が分る。結果としては「〇時まで

お母さんはいませんよ」「いいよ」ということで落着いたけれど、たまたまこういうことになった、というのならともかく、今の若い母親にはこういうように自分の都合で事を運ぶことが多過ぎるといえる程、いろいろな事でも身勝手である。

再び買物ごっこの話しに戻るが、私が相手になって、「一箇いくらのを○箇下さい。いくらですか」というように掛け算をさせたり、引き算をさせたりした事も学校からのニュースをちらりとみてその子供が今どういう事が出来るようになっていくか、どの程度の事柄を知っているか、ということを知っていたから、その子に合った相手をしてやる事が出来たのである。こういう点も幼児一人一人に適した指導が必要である、といいながら、一番よく知っている筈の親の扱いは、たいいていまかないことが多い。幼児という年令を考えず「私の子供は気が弱いからいつも叱咤激励して前へ押し出すようにするんです」等々、結果ばかりを変えようとする。そうなるとうるすための工夫は二の次になってしまい、子

供の方も親が見ているときはそうする、とか、親に言われなければできない、というように裏表ができたり、受身にばかりまわるようになる。

原因を考えたやり方を試みて、その子に合った方法を子供と共に見出していく、こういうようなゆとりが親にもほしい、と思う昨今である。

長い間に数多くの親と接してきたので、いろいろな親に関係ある事柄を書く、ということになってきたが、最近身近にあったことを取り上げてしまったので前おきが大分長くなってしまったが、保護者と接するとき、誰でも同じように、と心掛けているが私も人間なので話し易い人、何か心が開けずに話しにくい人とがある。

話し易い親について考えてみると

●ものの考え方、物事への対処の仕方が同じようである。

●子供と同じように、母親一年生、という感じで、話しをしたことに新鮮な対応をしてくれる。

●子供を育てることに意義を感じ、子供というのは不思議なもので、その大仕事に今自分はたずさわっている、という自覚を持って、子供と共に学ぶという態度で成長している。

●自分の子供だけを見つめるのではなく、同じ子供であるまわりの人や物にも目が届く広い視野を持っている。

これ等の事がみなそなわっているということは人間としてはすばらしい、完全な人、ということになるけれども、総て何等かで関連のある事柄だけにこの中の一つでもそなえていけば、向き合って話しをしているうちに次第に分ってくれる類である。

逆に、話のしにくいタイプというのは、

●子供のことに話しをすると、何でもすぐ分った、という合槌を打ってくれる。余りに調子よくすぐに分った、ということは、たしかに頭で、知識として分ったので分った事に安心し満足して、その先のそうなった原因についてまでの突

っ込んだ話しが進まず、から回りしてしまうことが多い。

●子供のことについて、「集団の中でどのように過しているか」「どうであろうか」と一応義務的に聞きにくるが、すべてにうわべだけで、返事したことについて何の関心も示さず、心を開かぬままただ聞いている、というだけ。

●自分の考えのもとに子供にさせていることに大変自信を持っていてそれをまげず、子供への影響について考えようもしない自信過剰型。例……三歳のときからクラシックの音楽会に子供を連れて行った、という母親（そういう情緒的な面のことも考えて育てているぞ、という自信がぶんぶん）。「最近の子供にいわれるんです。この頃音楽会につれて行ってくれないね、って」（うちの子供はよく覚えているのだ、という満足感がいっぱい）。「そのときお子さん静かに聞いていられました？長い時間はむずかしいことですかね？」といっ

てみると「始めはいいんですけど、お菓子をやったり大変でした」とやっと本音が出てきて、私は「ああよかった。当り前のことなのに」と思う

これは音楽会につれて行くことがどうの、というのではなく、その家の生活全体の傾向がそうだから心に引っ掛けてくる。親の考えたことに合わせられて成長する。子供は親が喜ぶからそれに合わせる。そのことは親は知らない。子供の心の中には次第に満たされないものがた



まっけてゆく。何年かたってその子が学校の帰りに仲々家に帰らず、駅などで遊んでいて「家には早く帰りたくない」と言っている、ということが耳に入ってきた。やっぱり、という思いでいっぱい。これ以上の悪い事態にならないければよいが、と離れたところから思っている。

私に対して表面的には同じように向かってくる人達だけれど、本当にいろいろな親がいるのだ、いつも感心してしまう「親の姿」である。

(洗足学園)